

清代台南府城の「会」、「境」と「郊」： 旧中国都市における民間の公共組織

斯 波 義 信

はじめに

都市を考察したり比較したりするとき、なにをもって都市とみなすのかをめぐって一般化しておくことが必要である。都市社会学を参照すると、(一)人口の大量性、(二)人口の密集性、(三)人口の異質性の三要素をまず考える。(一)と(二)は形態的に可視的であって、(一)は人間生態学、(二)は社会構造論という考察の分野が成り立ち、そして(一)と(二)を土台にし、さらに(三)を合わせてそれらの相互作用の全体について、都市という集落に特徴的な生活態度、生活様式、これを都会人の意識論、態度論として究める分野が成り立つ。このように都市に特徴的な生活様式や意識や態度はこれをアーバニズム(都市性)と呼び、集落がアーバニズムに次第に近づいてゆくプロセスをアーバニゼーション(都市化)と呼ぶ。こうした本来の考察を省いて、いきなりある都市をもって、近代的であるか否か、またその系譜はなにかを問うことは、短絡を招きかねない。

経済史を含む歴史的な都市研究においても、都市がなにかなく社会現象、社会表象であるということから出発すれば、上記の(一)人間生態論、(二)社会構造論、(三)都市化・都市性という切り口を語るに足る知識を一般化させることが先決だと考えた方がよい。しかし歴史家はとかく歴史的個性、文化や価値意識の特殊化に目を注ぎがちである。中国都市を例にとると、城壁の設営、方形の形状、碁盤目のレイアウト、それらの象徴的・文化的な意味合い、政治都市の制度・理念に偏った形でこれまで知識が蓄積されてきた。

中国人は過去でも現在でも、都市のことを「城市」と呼ぶ。それは城郭都市が夏・殷・周以来の悠久の伝統を継ぎ、これが官僚帝国時代にも形態として引き継がれただけでなく、漢語の「城市」の含意じたいが、官僚制の発達や儒教理念の補強によって裏打ちがなされつづけてきたことにも由来している。「城市」は国都から省城・府州城・県城にいたる行政都市だけに留保された漢語である。このため宋から清、民国にかけて府州城・県城とならんで発達し普及してきた鎮とか市と呼ばれる町や都会(大都会としては漢口鎮、景德鎮、仏山鎮などがある)については、これを「城市」には含めない。実際にみても、鎮には城壁を認めず、孔子廟・学

宮（日本の天満宮）を許さず、官庁も派出所以上のものは置かれなかった。こうした文化主義そして政治主義は、都市を含む社会事象における記述の態度、重点の置き方、記録されるべきものの選別、したがって記録の残り方に深い影響を与えてきたのである。

このブランクないし知識の片寄りをのりこえてゆくためには、社会科学的な実地調査によって手がかりをつかみながら、史料を集め、解析をしてゆかなければならない。ここではその一つとして、社会組織、社会構造、そして（行政的な統制はさておき）都市の日常的生活はどのように運営され、組織されていたかを考えてみる。その手がかりを与える社会調査としては、19世紀末から沿岸の条約諸港についてなされた英米海関職員の報告¹⁾、さらに北京で集中的になされた米国社会学者の調査と分析がその最初であり²⁾、商工組合（行会）あるいは商工業者などの同郷・同業組織（会館・公所）による自律的・互助的な活動をとらえて、これを西洋中近世のギルドに相当するとして、その後の研究を方向付けた。いうまでもないが、1920年に没したマックス・ウェーバーはこれらの知識を骨子とし、宣教師の報告、旅行記、そして若干の欧訳された中国古文献の知識によって、また彼ならではの天才的な洞察力によって、文化社会学の切り口からする中国都市論を提起した³⁾。

ほぼ同じ頃、日本人の調査研究でも臨時台湾旧慣調査会が台湾諸都市に⁴⁾、東亜同文会が本土 893 都市（659 行政都市、234 非行政都市）の行会・会館・公所についてかなり詳しい調査をした⁵⁾。そしてこうした欧米人・日本人の得た知識によって、旧中国都市の社会組織を解く手がかりは、なканずく行会、会館、公所の機能にあるという見当がつけられた。歴史学者はそれらの発生の系譜を調べ、時系列的な成長の推移を探る努力をすすめたが⁶⁾、その一方で、実情をトータルにを知る上で重きをなす社会学・人類学の方法を用いた研究は、1930、40年代の中国で芽生えはしたが⁷⁾、戦争と戦後の社会変革の間はきわめて限定された地域、地方でのみ実施され、広い地域に残っていた旧慣や旧制度そのものの多くが、記録され叙述されることないままにうつろえ消失していった。

この間、東亜同文会の調査を率いた根岸佶氏⁸⁾、北京などの実地調査を経験した仁井田陞氏⁹⁾、内蒙古と華北の隣接地帯の諸都市を調べた今堀誠二氏らによって¹⁰⁾、19世紀半ば以降の漢口、沙市、洪江、重慶、汕頭、上海、台南・營口、包頭、歸化城などの地方の商業貿易の中心都市において、有力な会館・公所からなる連合組織が一般の同郷・同業ベースの群小の組織の上に聳立した機構をつくり、消防、救貧、孤児院、養老院、浚渫、街路維持、埠頭・倉庫の設営、商事調停、防衛、対官折衝、祭礼の執行などの、「市政」に当たる職能を当該都市の内部・周辺の地域を対象にして行っていたことをつきとめた。1950～70年代には調査研究は台湾都市や海外の華人街を除いては実施できなくなるが、80年代から主として文献を駆使した都市社会組織の新しい研究が蘇り、ウィリアム・ロウ氏による漢口鎮¹¹⁾、D. フォーレ¹²⁾、

羅一星氏¹³⁾による仏山鎮の研究などが出る一方、夫馬進、梁其姿氏らが江南諸都市において有力な会館・公所の団体が運営した「善堂」（孤児院、救貧院、医療、寡婦救済施設）の詳細を明らかにした¹⁴⁾。これらはほぼ「全市」規模で営まれ、たとえば上海の有力な善堂は20世紀初に成立した同市の「総商会」（商工会議所）の、あるいは「上海工程局」という市役所の前身として発展してゆくことが判明した。

さて、こうした「ギルド」研究の進歩にもかかわらず、果たしてこのような形のギルド団体による自律能力の発揮は、19世紀半ば過ぎの政治・社会状況の変化に対応して台頭したものであったのか否か、また事例が中央を離れた商業貿易の中核都市について見られるところに、なにか共通性・規則性があるのかどうか、さらにそうした商紳の指導力によるロータリー・クラブにも比定できる公共事業は、市民一般の日常的な生活をどのていど律するものであったのか、これらの間はまだ明確には答えられていない。注意すべきことは、商紳サイドのイニシアティブでなされる公共活動は、歴史史料のなかでは官治を補完する「善行」と目されたときにのみ記録されるのが常であって、ふつうは商人サイドは目立つことを避け、隠れた歴史に留めておきたがるということである。以下に人類学者のクリストファー・シッパー氏の「旧台湾における近隣信仰団体」¹⁵⁾、台湾省文献委員会の林衡道氏編の『台南市市区史蹟調査報告書』¹⁶⁾、臨時台湾旧慣調査会編『台湾私法』¹⁷⁾、ジョン・シェパード氏『台湾辺域における政策と政治経済：1600-1800』¹⁸⁾を主な材料として、この全般的に未知な問題に照明を充ててみることにしたい。

1. 台湾の都市化

台湾島に漢人が入植しはじめたのは、明・清の交替が生じた17世紀の初頭あたりからであり、そのころの同島には約10万人、20語族に分かれる原住民が住んでいた。オランダの占領期(1624~61)の末に漢人は5万、つづく鄭成功時代(1661~81)の末に清が併合したときに約8万、康熙年代の漢人渡航令を雍正帝がゆるめ、乾隆帝がこれをより広げた1777年に平地原住民を含めて83万9803人、19世紀のうちに100万人をこえ、1903年に漢人が209万人、現在では総人口が約2200万人である¹⁹⁾。つまり18世紀前半の移住の解禁とともに、本格的な入植がおこった。移民は至近の対岸、福建省南部の泉州人(45%)、漳州人(35%)、そのとなりの広東省嘉應(梅)州と潮州(16%)の客家という三グループが集中的に渡来した²⁰⁾。

移住と開発は台湾南部の台南とその周辺から始まった。これは澎湖諸島を中にはさんで泉州港や廈門港と結ばれる航路があったことのほか、そのころ大円(タイオワン)と呼ばれたこの地が、狭い入り口を二つの岬が巾着型に囲むラグーン湾の奥にあり、帆船時代での安全な良港であったことによる。まず澎湖諸島の占有を試みたオランダ東インド会社の商船が福建省の官憲に拒まれ、その代わりにまだ帰属関係が空白であった台湾の大円港に入った。そして湾口の

岬にゼーランディア城砦、大教会をつくり (1624)、翌年に大円の波止場を去る 30 メートル地点から東南に向けて、長さ 340 メートル、幅員 15 メートルの直線の街路を設け、両側にオランダ人の倉庫、住居、病院のほか、漢人の商店 30~40 軒をならべてこれをプロヴィンティア街と呼び、中央北側に高さ 10 メートル、煉瓦造りのプロヴィンティア城 (赤嵌楼) を築いた²¹⁾。これがそもそもの台南の都市化のおこりである。その 12 年後の 61 年に鄭成功の軍勢に追われるまで、オランダは台南の周りから北は今の嘉義県の辺までを制圧して後背地にくりいれ、ミッション・ステーションを布置するとともに、漢人を招いて米とサトウキビ、ボラの干物をつくらせ、鹿皮を集めさせた。バタビア城への補給と貿易に役立てるためである²²⁾。

鄭氏政権の経済支配の形はオランダ期とへだたるものではなかったが、都市行政では中国化に一步をふみだした。プロヴィンティア城は承天府に、ゼーランディア砦は安平鎮に、承天府とその南は万年県、その北は天興県の管轄区に改め、方面軍管区に当たる北路と南路を設定して、それぞれ安撫司を置いた。ついで承天府の庁舎を東門近くに置き、簡単な城柵を設営し、孔子廟、学校、書院 (私設の学院)、一応の科擧の施設もとのえた。清が 83 年に併合すると、承天府を福建省に帰属する台南府に、かつて府庁のそばにあった万年県庁を台湾県に、天興県を諸羅県 (後の嘉義県) に改名し、南方の後背地のなかに鳳山県を置いた。当時の行政の重点はむしろ軍務にあって、鄭氏の残党、原住民、移民の間の小競り合いを制圧するために、福建省に駐在する漢人の緑營 (正規兵) の中から 16 營、1 万 4000 人の兵を三年で一交替 (班兵制) によって派し、これを府城内の鎮台 (鎮標) の左・中・右營、城守營、水師營、さらに上述した北路および南路の総兵官にそれぞれ分属させた。要するに、文治行政の拠点として一府とその周りの三県があり、これにオーヴァーラップする形でもっと広域の軍務行政の拠点が南北に広がっていた²³⁾。

その後の上からの都市化のプロセスとしては、諸羅県を足場にした拓殖が北に伸びると、今の台中のやや南に彰化県が 1723 年に置かれ、31 年その外港の鹿港に巡検庁 = 民事警察庁が置かれ、さらに 23 年に北部の淡水盆地の竹塹 (今の新竹) に広い行政領域を管轄する淡水庁 (この庁は府と県の間ランク) が新設された (1875 年、新竹県に降格)。かつて台湾県に帰属していた澎湖諸島は 1727 年に澎湖庁とされた。19 世紀に入ると拓殖の焦点は南部・中部から北部に移り、1811 年、基隆河の盆地が葛瑪蘭庁の行政域となり、1875 年、北部の取引の中心地であった艋舺の市街が台北府となり、艋舺の地は淡水県に、旧淡水庁は新竹県に、旧葛瑪蘭庁は宜蘭県に改名され、別に基隆庁を設けた。1887 年、台湾全島は福建省から離れて「台湾省」となって台北府が省城となった²⁴⁾。

2. 台南の都市化

再び台南に戻り、地図を参照しながら都市としての成長の様子を見よう。はじめプロヴィン

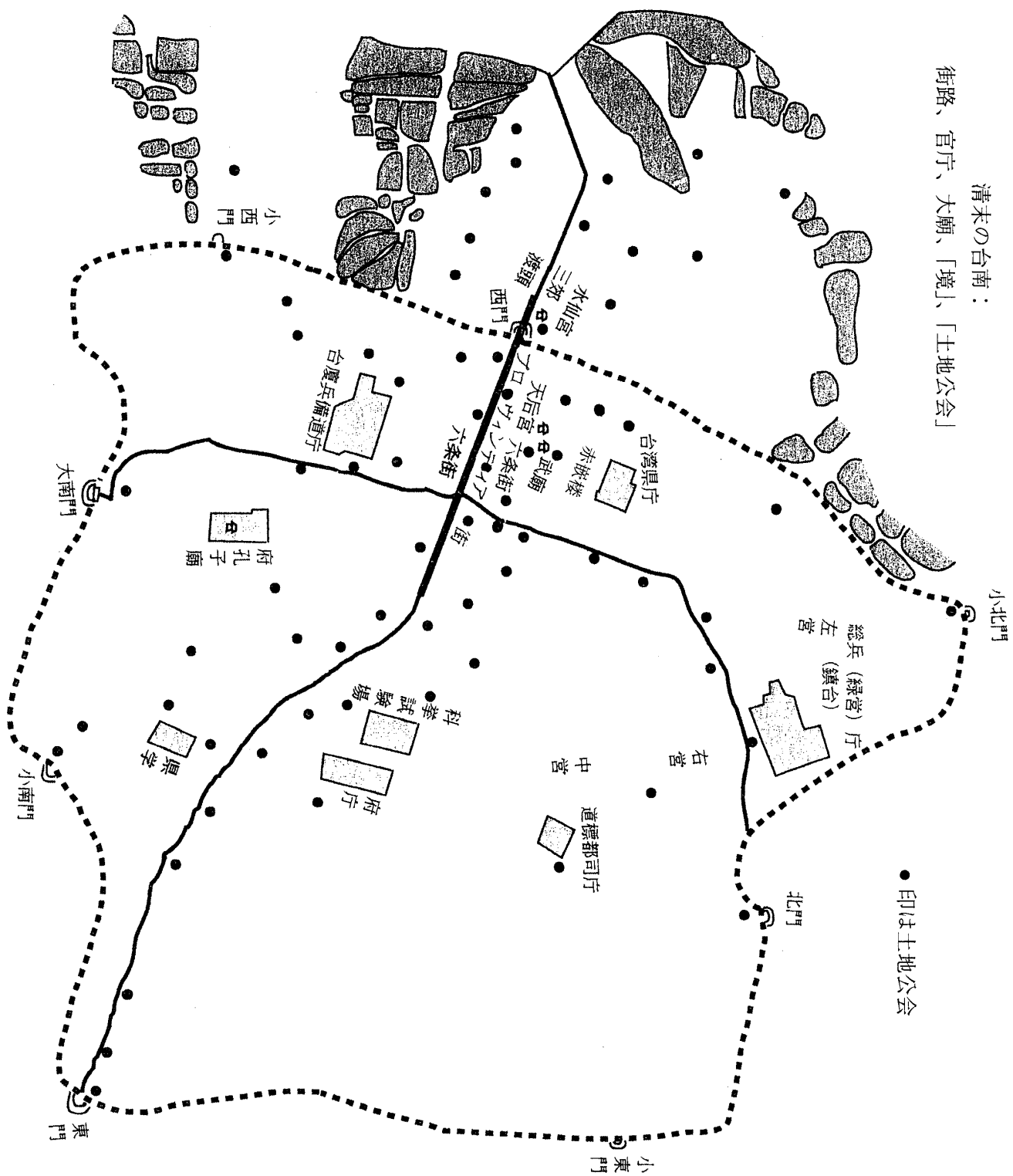
ティア城のときの町は、ヨーロッパ風の小都市であって、当初の人口は 500 人ほどだったが、バタビアから漢人を 170 人、1000 人と運んできて、町はほぼ 1 万人近くになり、貿易利潤は同東インド会社の収益の四分の一あまりに上った。鄭氏が領有した 23 年の間と、清領になってから 1730 年代、つまり大量移住が始まる直前までの台南は、軍人や役人の駐在を含めて 3 万人ほどの都会に成長しただけでなく、目に見えて中国風な都市になってきた。鄭氏の承天府庁は初め赤嵌楼にあったが、やがて旧プロヴィンティア街をその先でやや東南方向に曲げて延伸し、旧街の三倍ほどの「東西路」に伸ばし、それに沿う北側に府庁を移し、近くに府城隍廟（官営の都市神、道教）や科挙の試験場（貢院）を置き、南側に国子監（大学）や孔子廟を設けた²⁵⁾。このように割合に閑静なところをわざわざ選んで第二の市心として行政と文教のセンター、イデオロギーのセンターを新規に設けた点がおもしろい。

なぜかという、オランダ時代のプロヴィンティア城は防御と貿易の目的に即して波止場近くに立地した西洋風の町であったが、鄭氏の時期までにその人口の大半は福建・広東から来た移民集団で占められていた。かれらはまだ治安が定かでないこの都市に定住するにあたって、それぞれの郷里で信奉していた本廟の香炉の灰を分けて持参し（分香）、この地で支廟を設けてはそのまわりに集住した。彼らにとってもっとも身近で確かな「権威」はこうした支廟に他ならなかった。たとえば、旧プロヴィンティア大街の東の端から南門に向かう東大街のほとりには鄭氏時代にさかのぼれる小南天廟がある。これは福建・広東地方の民俗信仰として普及している「土地公（福德正神）」つまり土地と冥界を司る神の廟であるし、府庁から東西街を越えて南に明末の創建、つまり当地では最古とされる陳稜將軍祠があつて、隋代に琉球（台湾）を討ったと伝えられる陳將軍を祭る軍神廟だが、鄭氏の末期になって疫病を治癒する神、保正大帝吳真人大道公の開山宮（開仙宮とも）の大廟（204 坪）に改められた。保正大帝は清水祖師、開漳聖王、広沢尊王などとならんで福建でポピュラーな土俗神である²⁶⁾。

こうして自生した民廟に対して、府庁のまわりに府城隍廟、貢院、孔子廟などを置いていった意味合いは、鄭氏政権が民に官憲の駐在を知らしめ、少なくとも民廟に対して「権威」のバランスをはかろうとする試みだったにちがいない。ともかく、このように台南には古廟が無数にあった。1977 年次の台南には全て 203 の寺廟がまだ残っていたが、このうち明末から清代にかけて建立されたものが 83（約 4 割）である。鄭氏時代の建立は 26 で右の 3 割に上り、康熙に 17、雍正に 4、乾隆末（1795）までに 12、すなわち 83 のうち 7 割が初期の 200 年間くらいのうちに建てられた²⁶⁾。以下の第 3 章において、台南における民間信仰に媒介されたコミュニケーションの秩序を考察するが、その前に清代における台南の都市成長を概観しておこう。

1683 年に清が領有した直後、旧赤嵌楼のまわりの旧大街の南北に重要な官庁が配され、鎮守台湾総兵官署（鎮台）、台廈兵備道（道台）、が広大な敷地を占め、いったん府庁の近くにあ

清末の台南：
街路、官庁、大廟、「境」、「土地公会」



った台湾県庁を赤嵌樓の後ろに持ってきた。鄭氏時代の 1669 年から赤嵌樓のすぐ南にあった開基武廟（小関羽廟＝武神・商業神）および同じく古い大関帝廟のうち後者が道台の支援で壮麗に修理され、その隣にこれも壮麗な天后宮（媽祖廟、福建広東の航海神）が貿易ギルド集団の三郊（後述）の支援でできた。清朝では諸廟をランクづけて、政府が公認して世話をするものを大祀・中祀・群祀の順に分けたが、道教神の関帝と天后は城隍や火神などとともに群祀のなかにあり、つまり官廟と民廟との接点に位置していた。県庁のすぐ南に関帝廟と天后廟が置かれていたというこのことは、この一帯を官民ともに事実上の市心地域として認めていたということである。

やがて 1721 年の朱一貴の大乱の翌々年、はじめて全長が 8518 メートルに及ぶ木柵による城壁と大小 8 門が台南を囲った。面積は 337.7 ヘクタールである²⁸⁾。このサイズは 1887 に省城になった台湾府（台北）の全周の 5026 メートルよりも、また他の県城の平均よりもはるかに広い。のち林爽文の乱の直後、1788～91 年に高さ 5.76 メートルの土城に改まり、その後に石や煉瓦で舗装された。では当初は 3 万ほどの人口しかいなかったのに、なぜこんな大城にしたのか。ちなみに、本土における省城の面積と比べてみると中の下くらいで、福建の省城（505 ヘクタール）、これにつづく長沙、南昌のやや下だが、台南と同ランクの府城の本土での平均値が 200 ヘクタール程度であるのに比べるとかなり大きい²⁹⁾。おそらく鄭成功が設営した承天府城がすでに広く、管下の県も二県だけだったので、軍政・民政のあらゆる機能を収める大城がつくられ、それを清が引き継いだためだろう。

ともかく城壁の設営とともに四大城門を結ぶ東西路と南北路という十字形の軸線が成り、これに沿う形で街路組織と家屋・人口の配置による肉付けがすすんだ。この両大街の端、すなわち大東、大西、大北、大南の各門は、日常の補給物資が流入する主なセクターをなし、大東門の周辺は穀物・竹材・筍・果物が、大南門外は青果物、大北門内外は米、大西門外は輸出品（砂糖、米、籐、鹿皮、鹿肉、樟腦など）、輸入品（絹、麻、陶磁、石材、薬、南洋の物産など）の集散地であり、小西門外は魚市場だった。輸出入に絡む倉庫、卸商、加工業は大西門外に分布し、大南門、小南門、大東門にわたる城壁の内側、そして大北門の内側は市民向けの穀物・青果・薪炭の露天市場と車馬の繫留値となった。城内で街路・人口・商工店の密度がもっとも高かったのは旧プロヴィンティア街をはさむ区域であった。なかんずくその核は赤嵌樓に南接する関帝廟・天后廟の辺の碁盤目状の「武廟六条街」であり、高級な小売店が集まった³⁰⁾。

次いでそのすぐ東、南北大街に沿う五全境は曾振明街ともいい、寺廟や家の祭壇で使う紫檀や乳香製の抹香を全島の顧客を相手に売る香燭店 16 軒が並び、香鋪郊という同業ギルドを設けていた。赤嵌樓の西側から海岸にかけては薬屋、精米業、その糠や粉米を使う菓子屋、帆布屋、精糖場が分布した。六条街の南には福建産の花崗岩を屋材に加工する石屋、提灯屋、金銀

細工屋、製鉄屋、針屋、造花屋、靴屋の同業町が目立ち、これらに混じって肉・魚・野菜の市場、ピンロウ・干物・あひる・豚・竹・麺類・生花・鮮魚の市場がちらばっていた³¹⁾。ではこのように複雑に分化した台南の社会は、いったいどのような秩序によってまとまっていたのだろうか。

3. 「街」「会」「境」および「郊」の秩序

台南には官製の市区ブロックとして鄭氏の 1664 年から四つの「坊」（東安、西安、南寧、鎮北の各坊）とこれに分属する 34 区画の「里」の制があって治安と司法の地域単位となり、各坊に簽首、各里に郷長が置かれ、これが清代にも行われ、さらに 1851 年、坊の区画を細分して 7 の「保甲」区に、85 年には 35 の保甲区に分けた。ただ西門外は「城西区」として郊外の扱いをした。さて地図で見ると、東安坊が 195、西安坊が 52、寧南坊が 18、鎮北坊が 76 各ヘクタールを占め、広狭がまちまちである³²⁾。察するに、はじめに東西路と南北路の軸を基準にして、実際の人口分布に合わせて区画をしたものが制度として固定し、その後の人口増、分布の変化については、さらに「保甲」の網の目を併設してこれを細分化することで対処したまでであって、およそ官製の組織というものはこのような大まかなものである。

域内外の民衆の実際の社会生活を機能させ、秩序立てる組織は別にあった。それは下から「街」、「会」、「境」、「郊」と積み上がる形をしていた。その底辺の部分は宗教的な祭祀団体の外貌をしているので、公記録にはめったに載らず、街路名などの中に顔を見せるにすぎない。1960 年ころから台南市の道教寺廟を調査した人類学者のシッパー氏によると、1870 年次において全域の街路数は 83 ほどあり、一方、全体の「土地公会」（福德正神・土地公の祭祀を目的とする近隣団体）は 73、すなわちほぼ一街路に一会があった³³⁾。台南の土地公の有名な廟としては道台庁近くの小南天、西門外の景福祠、鎮台庁から南下する北街沿いの総祿境廟（下土地）、鎮轅境廟（頂土地）、東門内の祝三多、聖公廟があるが³⁴⁾、一般の土地公会は特にこうした廟をもたずに、各街が小さな神像や祠を捧持し、同一の街路にある家々が 30 軒ないし 50 軒、「炉火」という会員の組織をつくっていた。会には毎年輪番で選ばれる惣代（炉主）と副惣代（頭家）がいて、会がもつ一、二軒の借家からの収益とか、会員からの年会費を管理運営し、収支を記帳した。1933 年に全市の大小の寺廟は全てに 31 のこうした借家と七町歩の敷地をもっていた。土地公会の日常の業務は、会規にしたがって自分たちの土地公が鎮座する街路を清潔かつ平安に保ち、放浪者や賭博者を閉め出し、やたら高層の建物の建設を阻んだりする³⁵⁾。

炉主や頭家の大きな役目は祭礼を取り仕切ることである。街路が集合したクォーター（角頭）には、数個からそれ以上数の土地公会がその地区の大廟とつながりをもっていた。その大廟は土地神の廟とは限らない。土地公会は大廟の神の生誕節の祭りには関わらないが、その大廟で旧暦の七月に催される普度勝会とか、20～30 年ごとの改修を祝う大祭（大醮）の時は供

物を供え、費用分担をするなどして祭礼をもち立てた。あとで述べるように、基底の近隣祭祀団体は土地公会のほかに火神会などもあるが、とにかくブロックごとに大廟を境主とする小祭祀団体のまとまりの「境」があった。「境」というのは「合境平安」の意味だとされる。『台南市市区史蹟調査報告書』に載るものとして、六興境、六合境、人和境、中和境、八協境、四聯境、四安境、八吉境、六和境、十八境、総祿境、鎮轅境、三四境、五全境はすべてその「境主」の神が特定できるもので、このほか安祿境、元会境、七娘境、油行尾境、太平境、載興境などは街名と化しているために存在を知ることができる³⁶⁾。

一例として西門のすぐ前の繁華街にあった水仙宮という大廟を見ると、これはギルド団体の三郊（後述）が支えており、五つの土地公会と一つの火神廟会を組みいれて「境」をなしていた。その中の一つの土地公会は波止場近くに鎮座する土地公の祠を奉ずる、看西街と南河街という直交する二街の計 31 店が会員であった（1907 年次）。水仙宮の普度祭の日になると、土地公会の炉主は神像を抱いて所定の神輿に乗り、楽隊と会員を連れて宮の祭礼場に行き、特設された壇に神像を安置し、神と一緒に祭の進行を見て祝宴・芝居にも参列する。看西街の火神の支廟を奉ずる火神会は、30 あまりの裕福な商店から成る会だが、普度会の時は土地公会の行列に付きしたがって参列する。しかし火神の生誕の例祭になると、全市の他の火神会とともに神輿と楽隊のパレードを整えて、南門外にある火神の本廟にむけて巡礼団を繰り出した³⁷⁾。土地公については火神のような本・支廟関係や神輿の巡行がない。それは土地公の信仰があまりにも広く普及しているためである。

地元の境の土地公会を招請した水仙宮、その施主であった三郊は、ほかに 1683 年に建立された上述の大天后宮という群祀クラスの大廟（500 坪）についても実質上の運営団体であった。三郊はその同年に波止場近くに池府王爺を祀る普濟殿（93 坪）を興し、1715 年に航海神である水仙宮（187 坪）を建立、廟前に「三益堂」という事務所を置いた。堂は会よりも上の組織である。さらに 36 年、波止場に三郊自らの天后宮を建てるべく、福建興化府の本廟から「分香」して広大な「海安宮」（1235 坪）を建てた³⁸⁾。三郊が大施主となってもり立てていたこうした大廟の祭礼は壮大なものであり、全市に分布する「境」「会」などの宗教的な組織に絶大な影響力を持っていたであろうことは察するに難くない。

「郊」とは商人団体ないし同業組合をさす廈門や台湾に独特の用語であるが、台南の三郊は、もともと泉州・廈門からの外来商人団体であるといっても、この地では潮州勢力を除けばほとんどが泉州・廈門両地方からの人なので、本土の商業都市における会館とか公所のほとんどがなканずく同郷性を強調するのとは異なり、むしろ卸商・貿易商の組合という色彩を備えていた。三郊（三益堂）とは北郊・南郊・港郊の連合体という意味である。その区別は台南を起点としてみた海上貿易の航路と取引先によってつけられていた。北郊は創立者の蘇万利を初代の

炉主とし、寧波・上海・天津・煙台・牛莊に向けて砂糖・竜眼・樟腦・石炭・硫黄を売り、薬・織物・酒・雑貨を買う。南郊は金永順が初代の炉主で、泉州、廈門から香港・マカオに向けて米・糖液・干物・筍・豆粕・藍などを売り、織物・陶器・瓦・アヘン・薬を買う。港郊は李勝興が初代の炉主で、台湾の諸港との間で米・麦・豆・豆粕・糖液の集荷と販売をした。19世紀末に北郊が20、南郊が30、港郊が50、計100店を炉下（会員）にかかえていた³⁹⁾。

台南の三郊は郊規（規約）と帳簿を備え、府の長官の認可をうけた公式団体である。加入強制はないが、水仙宮一帯の市街には巨商がひしめいていて、そのおもな商店はみな加わっていた。収入は入会の際に会員志望者が納める挿炉銀（入会費）のほか、各会員が取り引きする輸出入の各貨物につき定率でかける厘金があり、これが年に500元にも及んだという。月割と年割の会費もあった。こうした収益で土地や家屋が買われ、それはすべて共有の資産とされて、会員間で分割することはありえなかった。最大の支出項目は大天后宮の祭礼の費用（4割）であって、聖誕節には神輿が宮を起点にして全市の大街・小街をくまなく巡行して、天后宮が最大の信者を組織していることを印象づけた⁴⁰⁾。

経常支出のうちの大口の項目は、ラグーン湾（台江）内の航路筋に当たる五つの滯を浚渫する費用で、7年、10年ごとの大浚、毎年の小浚のための「開港土費額」を三郊がいっさいを負担した。これに劣らぬものとして、大小の内乱、海賊、清仏戦争（1884-85）などの非常時において、副惣代（董事）が責任者となって大金を出し、義勇兵をつのって政府の指揮下に入れた。波止場を護る出城も三郊の支出でつくられた。さらに三郊は政府当局から民事商事上の司法・裁判権についてかなりののていど執行を一任されていた。台南三郊の全盛期は18世紀と19世紀の前半であって、この間に湾内がシルトで浅くなって港湾として衰えを見せ、また北部台湾に人口・産業・商工業の重点が移ってゆき、艋舺（台北）に集散中心としての機能を譲ってゆく。それでも20世紀初めに炉火37店を数え、これがそのまま台南商工会に再編された⁴¹⁾。

桁はちがうが三郊に次ぐ組織として、武廟（大関帝廟）六条街があり、「六合境」ともいった。ここには西門外の間屋街をへて仕入れた比較的に高級な商品进行店が、竹仔街、武館街、大井頭街、帽子街、下横街、武廟街を連ねて集まっていた。その組織を「六条街公所」といい、防火のための自治規約を刻んだ石碑が残っている。またこれも規模の小さい郊として、布郊、魚郊、米郊、薬郊、香鋪郊、竹郊のごとき個別の同業組合の存在が知られている⁴²⁾。一方、大天后宮の規模には及ばないが、「街」「会」の上位にあって一「境」ないし数「境」範囲の地域に宗教的な影響力をふるう大廟は数多くあり、その詳細を伝えるには紙幅がない。ただ「街」「境」の守護神であるとともに、特定出身地の同郷者集団に捧持されている寺廟があるので、それらを掲げておこう。廈門と泉州安溪県の人々は府庁の南西で大街をこえた地点にある清水寺（清水祖師を祀る）、泉州晋江県の人々は西門外の集福宮、聚福宮（共に玄天上帝）、泉州南

安県出身の港湾労働を職とする郭姓の人々は西門外の西羅殿（広沢尊王・郭大王）および府庁前の永華宮（同上）、福州人は北大街に沿う三官廟（天、地、水）や五帝廟（五顯神）、府庁の南西の西来庵、西門外の五瘟宮（五顯神）、広東潮州の人々は北大街の三山国王廟（中山・明山・独山＝潮州の神）、山東牟平県の人々は府庁すこし西の開隆宮（七星婦人、七娘境）、それぞれのまわりに住みついていた⁴³⁾。

おわりに

台南の宗教的な社会組織を若干のほかの都市のそれと比べてみよう。広州府城の西 16 キロにある仏山鎮は、鎮といっても 19 世紀の半ばで広東省では省都の広州に次ぐ第二、人口 30 万をはこる製鉄・製陶業の町であった。台南の大天后廟に匹敵するのとして、宋代から「祖廟」と呼ばれてきた白帝真武廟がある。ただ台南とやや違って、両市の発展の経過が組織にも影響した。仏山は製陶・製鉄という地場産業に適した好立地から起こった工業都市で、明代では有力な業者の諸族が「祖廟」をテコにリーダーを演じた。彼らが住み製造場もある仏山鎮の南寄り地域に九つの「社」という祭祀の地域単位ができて、その合議体が祖廟の膨大な共有財産を管理し、神輿の巡行や社会活動をリードし、こういう状態が清の雍正年代までつづいた。しかし広東省そして仏山自体の発展のなかで、新規に定住してきた外来の勢力が商工階層としても官界でも成功して力をつけ、祖廟の資産管理に参入し、巡行を全市的な行事に変えた。定住の歴史が古いためか、台南とちがって明代にはわずか数廟しかなかった仏山では、清末までに本廟から枝分かれした小廟も含めれば 170 にも廟がふえた。仏山の街市ブロックは、15 世紀半ばの地方反乱を自衛するために生まれた民兵団の名を残して、以来「鋪」と呼ばれ、清初に 24、清末に 27 鋪があった。祭祀団体の見取り図は、トップの「祖廟」→数鋪にわたる大廟→鋪ごとの主廟→街・巷ごとの廟という形であった。この「社」（明代）、「鋪」（清代）は台南における「境」にあたり、台南の「境主」にあたるものが仏山ではほぼ「鋪」ごとの主廟（実際に 25 の主廟があった）になる。仏山でも街・巷レベルで一街に一廟、一巷に一廟を基本にさまざまなヴァリエーションがあった⁴⁴⁾。

浙江省旧寧波府城下の鄞県の 1935 年の地方誌の廟社の項には、県下の主な廟の所在、祭神、組織、建立年代、信徒戸数、祭日を網羅した統計表がある。全県を 10 区に分けたうち、城内に当たる 1、2 区の記述のなかに「境」がしばしば登場する。一廟に一境、二境、三境というぐあい、2 区の寔聖廟は東二境、西二境、南一境の合計 5 境であり、信徒は合計 200 戸であるから、一境に 40 戸平均である。境が地名付きで呼ばれているもの、姓氏集団の名で呼ばれているものもあり、境の代わりに「柱」とするケースもある。1 区の東護城廟は境の下に同慶会などの会があり、これを近代風に委員会としている例もある。しかしいずれも記述が圧縮された内容の表の形式になっているので、土地公会のような下位団体までの言及はない。城内でもやや人口が過疎な 2 区、そして郊外である 3～5 区、さらに農村部にあたる 6～10 区の記録

では、境に当たる宗教的な近隣組織を一般には「堡」と称している。たとえば城の東郊、四区の櫟木廟は 18 堡にわたり数千戸の信徒がいて、2 堡ごとに廟事を司る委員がいるという。これは「会」を指している。こうして浙江省でも「境」を台湾のケースと近い意味に使っていて、それが特定の神廟の信徒集団のテリトリーであることが分かるが、「境」ごとに日本でいう末寺、末社、分社をもっているのかどうかは、この表では分からない⁴⁵⁾。

さらに、今堀誠二氏著『北平市民の自治構成』には、1943 年に調査した北京市の街巷団体の記述がある。氏によると、「街巷」というとき、それは道路ではなく道に面した両側の家々が構成する社会である。北京には前門外を含めて大柵欄という街区が二つあるが、それは日本の木戸のようなもので、木または鉄製の巨大な柵があり、折り畳まれた柵を伸ばすと交通が遮断でき、夜は夜回りによって火災と盗難をその街区ぐるみで自衛するものである。大柵欄はこの会を「義善会」と名付けていた。はかに氏が調査氏記録したものに公議、公義、治平、三善、同善、崇東、永濟、坎濟、保安、同義、普善、同人、普義及南郊一区、与善、安平、成善の合計 17 の「会」がある。すべて消防団、夜警の任務を表に掲げ、今堀氏もこの角度に重きをおいて説いていて、結論として同業をベースにするギルドと、近隣の連帯をベースにする「街巷」団体が、都市社会の運営の二大組織であるとしている⁴⁶⁾。この洞察はおよそ当たっているが、しかし「街巷」諸団体の内容をよく読んでみると、台南の「会」「境」「郊」について見たような、宗教的な祭祀を媒介とする社会関係、あるいは仏山鎮の「祖廟」を頂点とする統属組織とも通ずるものがある。

要するに、中国の都市組織はギルドだけから照明をあてたのでは不十分であって、公記録には残されにくい、しかし日常生活ではきわめて重い意味合いをもっていた近隣団体、宗教的な結束を解き明かして、総合判断にもたらしべきである。この意味で研究はまだ萌芽状態であって、性急にシヴィックなコミュニケーションの存否を占う議論は短絡の域を出ないことになる。

注

- 1) D. J. MacGowan, "Chinese Guilds or Chambers of Commerce and Trades Unions", *Journal of North-China Branch of the Royal Asiatic Society*, 21: 3. 1886. H. B. Morse, *The Guilds of China*, London, 1909.
- 2) S. D. Gamble, *Peking: A Social Survey*, New York, 1921. J. S. Burgess, *The Guilds of Peking*, New York, 1928.
- 3) M. Weber, "Die Wirtschaftsethik der Weltreligionen. I. Konfuzianismus und Taoismus," *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Tübingen, 1922.
- 4) 臨時台湾旧慣調査会編『台湾私法』全 6 巻 6 冊、同調査会、1910-11.
- 5) 東亜同文会編『支那省別全誌』全 18 巻、同会、1917-20.
- 6) 加藤繁「唐宋時代の商人組合「行」を論じて清代の会館に及ぶ」史学 14-1、1935、(『支那経済史考証』上巻、東洋文庫、1952、収)、「清代に於ける北京の商人会館に就いて」史学雑誌 53-2、

- 1942、『考証』下巻、東洋文庫 1953、収)。全漢昇『中国行会制度史』上海、新生命書局、1934。
何炳棣『中国会館史論』台北、学生書局、1966。
- 7) G. W. Skinner, ed., *The Study of Chinese Society: Essays by Maurice Freedman*, Stanford, 1979, pp. 373-379, "Sociology in China : A Brief Survey".
 - 8) 根岸佶『支那ギルドの研究』斯文書院、1932、『上海のギルド』日本評論社、1951、『中国のギルド』日本評論社、1953。
 - 9) 仁井田陞『中国のギルド』岩波書店、1951。『中国法制史研究：法と道德、法と慣習』東京大学出版会、『仁井田陞博士輯北京工商ギルド資料集（一）～（六）』東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、1975、76、78、79、80、83。
 - 10) 今堀誠二『中国封建社会の機構』日本學術振興会 1955、汲古書院、2002、『中国封建社会の構造』同、1978、『中国封建社会の構成』勁草書房、1991。
 - 11) W.T. Rowe, *Hankow, Commerce and Society in a Chinese City, 1796-1889*, Stanford U.P., 1984. *Hankow, Conflict and Community in a Chinese City, 1796-1895*, Stanford, U.P., 1989.
 - 12) David Faure "What made Foshan a Town? The Evolution of Rural-Urban Identities in Ming-Qing China" *Late Imperial China*, vol. 11: 2, 1990, Dec.
 - 13) 羅一星『明清佛山經濟發展与社会變遷』広東人民出版社 1994。
 - 14) 夫馬進『中国善堂善会史研究』同朋社出版、1997、梁其姿『施善与教化：明清的慈善組織』聯經出版事業公司、1997。
 - 15) Kristofer M. Schipper "Neighborhood Cult Associations in Traditional Taiwan" in G.W. Skinner, ed., *The City in Late Imperial China*, Stanford U.P., 1977.
 - 16) 台湾省文献委員会（林衡道）編『台南市市区史蹟調査報告書』同委員会、1979、以下『台南市』と略称。
 - 17) 前注 4)、巻 3 上。
 - 18) John R. Shepherd, *Statecraft and Political Economy on the Taiwan Frontier, 1600-1800*, Stanford U.P., 1993.
 - 19) Shepherd, pp.7, 14, 29, 154-62, 180, 199, 426.
 - 20) Shepherd, pp.137-176.
 - 21) 『台南市』 pp. 3, 4, Shepherd, pp. 47-90.
 - 22) Shepherd, *ibid.*
 - 23) Shepherd, pp. 91-104. 105-134. 『台南市』 pp. 21-27。
 - 24) Shepherd, pp. 137-214. 54
 - 25) 『台南市』 pp. 21-28, 89-103。
 - 26) 『台南市』 p. 154, p.164。
 - 27) 『台南市』 pp. 31-34。
 - 28) 『台南市』 pp. 95-103.
 - 29) Chang Sen-dou, "The Morphology of Walled Capitals", in G.W. Skinner, ed., *The City in Late Imperial China*, pp. 90-91.
 - 30) 『台南市』 pp. 30-31, 71-73.
 - 31) 『台南市』 p. 31, 41。
 - 33) Schipper, pp. 656-660.

- 34) 『台南市』 pp. 154-157.
- 35) Schipper, pp. 654-656.
- 36) 『台南市』 pp. 69-70.
- 37) Schipper, pp. 666-668.
- 38) Schipper, pp. 668-669. 『台南市』 29-30, 37-40. 『台湾私法』 卷三下、pp. 153-157.
- 39) 『台湾私法』 同上 pp. 153-177.
- 40) 『台市湾私法』 同上。
- 41) 『台南市』 pp. 36-40.
- 42) 『台南市』 p. 30, 『台湾私法』 同上 pp. 158-160.
- 43) 『台南市』 pp. 32-33, 145-175.
- 44) 羅一星『明清仏山經濟發展与社会変遷』。
- 45) 『民国鄞県通志』 輿地志、廟社。
- 46) 今堀誠二『北平市民の自治構成』 文求堂、1947。